

「石垣学」で問題解決の過程を楽しむ子供を育てる

～学びと生活をつなげて探究の楽しさを実感するしかけとは～

和歌山県有田郡有田川町立石垣小学校
校長 上田 恵

1. 「石垣学」始めました

「石垣学」とは、「学習と石垣小学校の児童の生活をつなぐ実感のある学び」であり、本校の造語です。令和5年度から、4つの柱にそって研究・実践しています。

- ・学んだことを生活や身の回りのひと・もの・ことを対象に活用する。
- ・ほんもの体験をとおして実感のある学びを進める。
- ・少人数であることのよさを生かして、異年齢集団での学習を進める。
- ・学んだこと等をアウトプットする機会を保障する。

本校が、「石垣学」に取り組むことになったのは、本校特有の課題があるからです。

2. 石垣小学校の児童

本校は、有田川町の中ほどに位置し、農業用のため池やミカン畑に囲まれた地域にあります。保護者は、以前からこの地域に居住している家庭が多く、保護者同士顔見知りであることが多いのが特徴です。両親の世代が農業に携わる家庭は少数です。

地域や保護者は学校に協力的で、ボランティアのように関わってくださる方も少なくありません。

児童は、与えられた課題に真摯に取り組み、素直で前向きです。全校46名の小規模校であり、1・2年生、5・6年生は複式学級ということもあります、児童皆がお互いのことをよく知り、上級生が下級生の面倒を見るなど異年齢でもよく遊び、仲が良い集団です。

反面、少人数のため、多様な考えに出会う機会が少なく、人前で自分の考えや学習の成果などを発表するの得意ではありません。また、自ら問い合わせたり、探究したりする機会が少なく、教えられたことを素直に信じてしまうところがあるのは否めません。自ら進んで何をするより、周りの様子を見て、皆がするならしようかな、と、積極性に欠けるのも弱点であると感じていました。

3. 石垣学の取り組み

そういった弱点を克服するために始めたのが「石垣

学」です。まずは「こんな学び方もあるよ。」と、学び方のモデルを示すことをねらって、「『石垣学』始めました」を合い言葉に、取り組みました。4つの柱にそって紹介します。

(1) 学んだことを生活や身の回りのひと・もの・ことを対象に活用する (学習と生活をつなぐ)

これは当たり前のことがですが、あえて単元の終末にこの活動を大切に位置づけることにしました。それは、まずは、「学んだことを活用する」という視点を持たせ、「生活や身近な社会の中から問題を見つける」視点へと発展していくことを期待するからです。

① 直径と円周の関係を活用して

5年生は、算数で学習した直径と円周の関係を使って、一輪車のタイヤの直径から円周を計算し、一輪車に乗って何回漕いだら運動場の登り棒から端まで行けるかを予想しました。1回漕ぐと一輪車のタイヤが1周します。大きいタイヤの直径が50cmなのでタイヤの1漕ぎは157cm(タイヤの円周)。登り棒から端までは47mですから、 $47m \div 157cm$ で、約30回漕げば到達するのではないかと予想しました。実際に一輪車に乗って検証した結果、33回漕いで到着しました。小さいタイヤの一輪車でも同様に計算したところ、約37漕ぎの予想でした。検証した結果、40漕ぎでした。予想より多くなった原因を、5年生は人が漕ぐと真っすぐ進めないからと考えました。

② 折れ線グラフの学習と電気代

4年生は、算数で学習した折れ線グラフを使って、石垣小学校の月ごとの電気代と、町内の同規模の小学校とを比較しました。その結果、本校の方がどの月も高いことが分かりました。そこで、その学校から転勤してきた教員に電気の使い方を聞いてみるなどして、電気代の違いの原因を推測しました。その結果を全校集会で発表し、全校に節電を呼びかけました。

(2) ほんもの体験をとおして実感のある学びを進める

予算がないから…という理由で、ほんもの体験を諦めたくはありません。そこで、県や企業などが実施する魅力的な事業に積極的に応募しました。また、地域の方の協力も得ました。

① 熊野古道を歩く

和歌山県主催の、世界遺産の「紀伊山地の霊場と参詣道」を体験する事業に当選しました。

いくつかのコースの中から「大門坂から那智滝の熊野古道を歩く」を選択し、まず、世界遺産センターの方がオンライン事前学習をしてくださいました。当日、4・5・6年生が大型バスで那智へ向かい、熊野古道を歩き、那智滝の大きさに触れ、感動しました。

② 専門家を招いて自然観察

春の遠足は、校外学習として、片男波海水浴場の近くの磯観察を行いました。磯の生物に詳しい元学芸員さんに来ていただいて、捕まえ方や、危険の回避の仕方、磯の生き物の特徴について教えていただきました。

「海は見たことあるけど、来るのは初めて。いろんな生き物がいて驚いた。」という子が数人いました。



見つけた生き物を、アドバイザーさんに同定してもらいます

初夏には、3年生以上が、有田川で水生生物調査をしました。川の近くに住んでいる子が「エビとかいておもしろいで。」と教えてくれたのがきっかけです。これも県の事業で、無料で水生生物に詳しい方がアドバイザーになってくださいました。ヘビトンボやカニ、エビなど、きれいな水に棲む生き物が見つかりました。児童は「もっと捕まえたかった。」と楽しそうでした。

③ パラアスリート教室

パラ走り高跳びの鈴木徹選手が来校し、実際に義足を触る等、高飛びのコツを体験的にワークショップしていただきました。「もう少しがんばろうって少しづつがんばれば気がつくと大きなことができている」と語ってくれたことが児童の心に響きました。

④ 地域の方のご協力を得て、米作り

公民館活動の一環として、5年生が田んぼをお借りして米作りをしています。収穫、田植え、稲刈りという一連の活動をさせていただくのですが、同じ収穫をいただいて、学校でもその育ちを観察しました。時々、お借りした田んぼを訪ねて、自分たちの稲との育ちの違いに驚きました。

刈り取った新米で、新米パーティを実施し、お世話になった公民館長、主事の方をお招きました。

公民館長には、5・6年生の総合的な学習の時間で取り組んでいる「野菜作り」の「畠先生」として何度か学校へ来ていただき、土作りや育



てる野菜の選定など助言をいただきました。

令和6年度は、地域の野菜作りが得意な方に協力いただいています。今年度は全校でサツマイモ作りに取り組み、広い運動場の片隅を耕耘して畠にしたのですが、そのときも大いに協力してくださいました。

ほかにも、低学年に手作りの工作材料を提供してくださる方や、全校に毎年、特産のイチゴやお花をプレゼントしてくださる地域の農家の方等がいて、たいへん協力的な地域柄にはいつも感謝しています。

⑤ 地域の文化や伝統についての学習

石垣小学校区は、鎌倉時代の高僧、明惠上人生誕の地です。そこで、明惠上人研究に詳しい方に出前授業をしていただきました。

また、校区にある石垣尾神社は、低学年は校区探検で、中学年は地図の学習や季節の学習などで必ず取り上げる場所です。春の餅まきや秋の例大祭の獅子舞は子供たちも楽しみにしている行事です。そこで、高学年は、石垣尾神社の由来や獅子舞の保存についての学習をしました。

⑥ 野菜作りで問題発見！

令和5年度、4・5年生が秋まき野菜を育てていたとき、問題が起きました。

白菜、ホウレンソウ、高菜、アブラナ、大根の葉が白変してきたのです。子供たちは、そのうち元に戻るだろうと楽観していましたが、どんどん育ちが悪くなり、枯れてしまう野菜も出てきました。

危機に気付いた子供たちは、野菜をじっくり観察して、葉の付け根に赤い小さな虫がうじやうじやいることを見つけました。調べると、ハクサイダニという冬の葉物野菜の汁を吸う害虫だと分かりました。

子供たちは、野菜を育てることを諦めず、農薬を使わない手立てを調べました。そして、「白変した葉をちぎってゴミ袋に入れる」、「雑草を抜く」、「肥料をやり過ぎない」ことを徹底しました。ホウレンソウ等、諦めざるを得ない野菜もありましたが、大根については次第に元気を取り戻し、立派に育ちました。

ハクサイダニの卵は夏を越えることを知り、夏の間はその畑を使わず、太陽熱消毒をすることにしました。

令和6年度、5・6年生になった彼らは、昨年よりもっと立派な野菜、また、初めての野菜に挑戦したいと、夏野菜作りに取り組みました。

あまりに暑く、野菜作りはなかなか順調にはいきません。オクラは、夏の始めの長雨で枯れてしまい、種を蒔き直し、スイカは、収穫前に雨が続き、実が落付いてしまいました。実際に活動しているからこそ問題が起き、解決したいという切実感が子供たちを動かします。

昨年、ハクサイダニの大発生で被害を受けたので、「今年こそは！」と、冬野菜作りに燃えています。失敗から学び、負けない子供たちの強さを感じます。

(3) 少人数であることのよさを生かして、異年齢集団での学習を進める

今年度は、1・2年生と5・6年生が複式学級です。

指導者は、子供たちの学習の進み具合を見ながら、それぞれの学年を行き来します。基本的には、どちらの学年も子供たち自身が司会者を立てて授業を進めていきます。指導者は、子供が困っていたりつまずいていたりを見極めて手助けします。指導者は2学年分の教材研究が必要です。

デメリットばかりに思えますが、そうではありません。自律的に学習を進める力がついたり、下学年は上學年の学習の様子を見ることで見通しが持て、時には一緒に学習したり、お互いの学習成果を発表し合ったりする中で、下学年は上學年から認められて自信をつけ、上學年は下学年から尊敬されることで胸を張ることができます。

① 1年生の音読発表に協力

1年生の児童数は2人です。「大きなかぶ」で音読劇

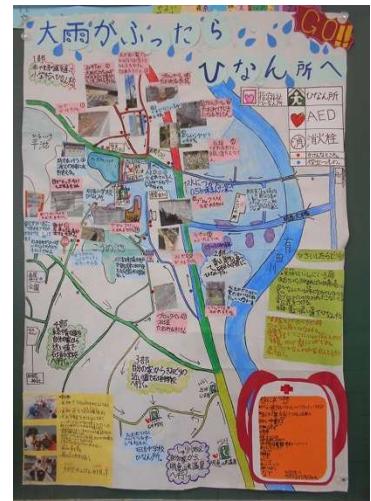
をしたくても人数が足りません。そこで、1年生の音読に合わせて2年生に演技をお願いしました。リハーサルなしでしたが、2年生にとっては1年前に学習した内容ですから、いいおさらいになったのでしょう。アドリブさえ入れて思いの外、ステキな音読劇になりました。

いつも一緒に2年生相手に発表することで、自信をもった1年生は、次の「おむすびころりん」の音読は、3年生に発表することができました。

② 4・5年生複式で協力して防災マップ作り

有田川町消防本部の協力を得て、グループごとに校区を担当地区に分けて、何度か歩き、防災について調べたことを、1枚の地図にまとめました。

この防災マップは、コンクールで消防長官賞をいただき、たいへん励みになりました。公民館に掲示して地域の方からもほめていただきました。



(4) 学んだこと等をアウトプットする機会を保障する

少人数学校の弱点の一つに、多様な考えに合う機会の少なさと、大きな場に弱いということがあります。

そこで、全校の前で発表したり、その動画を保護者に配信したりするなど、学習の成果をまとめ、アウトプットする機会を多く持つこと、オンライン交流で多様な考えに合う場をつくることとしました。

① 学習の成果を気楽に見てもらおう

これまで本校には、運動会や音楽会以外に全校の前で何かを発表するという機会がありませんでした。そこで、気軽に全校集会で発表することにしました。

3-1)、2)の5年生の直径と円周の学習や、4年生の折れ線グラフの電気代の学習をはじめ、全ての学年がそれぞれの「石垣学」について発表しました。

始めた頃は、ほかの学年は聞くだけでしたが、次第に発表後の感想を進んで言うようになりました。発表を聞いて驚いたことや勉強になったこと、よかつたこと

等を次々に起立して発言する光景は、成長を感じられ、感動的です。

③ こども園との交流

5年生は、翌年6年生として新1年生のお世話をすることになります。そこで、今から仲良くなるための交流をしようということになりました。

石垣尾神社の学習や小学校についてのクイズをプレゼンにまとめ、こども園と交流しました。平仮名が読めない園児だからと、プレゼンの作成にはかなり工夫をしたようです。

今年度は、5年生の子供たちの発案で、こども園の年長さんと水泳交流をしました。



プール交流の様子

③ オンライン交流で、素朴な疑問を解消しよう

5年生の社会科で「暖かい土地」や「高い土地」の暮らしについて学習したとき、特に疑問も感じずに学習を終えていく子供たちでした。

「実際に南の土地に住んでいる人に聞くのはどうかなあ？ オンラインでつなげるよ。」と提案すると、「そんなことできるん？」と目が輝きました。

「それならずっと南の方がいいな。」と地図帳を開くと「石垣島ってうちと同じ名前や。ここにも学校あるかな。」という声が挙がりました。

石垣島の石垣小学校に連絡を取って、オンライン交流が実現しました。どんなことを聞きたいか、質問項目を事前にメールで送っておいて、オンライン交流当日、こちらからの質問に答えていただきました。初めてのオンライン交流に興奮気味で、小声でぼそぼそ、挨拶もぶつ飛ぶほど緊張していました。

「高い土地」は、同じ和歌山県の高野山小学校にお願いしました。オンライン交流も2回目で、かなりはきはきと発言できるようになり、決めておいた挨拶などほぼ台本通りにでき、自信になったようです。

また、実際に顔を見て話したこと、石垣島や高野山に親近感がもてました。

2学期には、NHKメディアリテラシー教室に参加し、川崎市、鎌倉市、豊中市の小学校5年生と交流しました。5年生はこれでオンライン3度目だったので、大規模な学校との交流にも物怖じせずに臨めました。

これがきっかけで、3年生は県内の上富田町の学校と、4年生は中国の大連日本人学校と、特別支援学級は、

隣町の特別支援学級とオンライン交流をしました。

4. 主体性は問題解決の第一歩

今年の1学期、給食センターの栄養教諭が、5・6年生の食育指導に来校したときのことです。最後の質問コーナーで、6年生女子が「フルーツポンチを給食で出してほしい。」と要望したところ、2学期早々に実現してくれました。喜んだ本人が、お礼状を書くと、栄養教諭がそのお礼を言いに来てくれるということがありました。

毎朝、児童会が朝の会のお知らせ放送をしています。今年、児童会役員の提案で、放送の内容に「今日は何の日」を加えることになりました。

委員会活動でも、子供発の提案が増えてきました。

9月末の運動会に向けて、児童会や委員会がもっと主導権を握りたいと、練習のときから子供がマイクを持つ事が増えました。また、昨年、畠先生でお世話になった公民館館長さんを招待することになりました。

「石垣学」が少しずつ子供たちに変容を促しているようです。

5. TRY & ERROR で問題解決の過程を楽しもう

「石垣学」は、今年度まだ2年目で、あまり結果を急がず、細く長く続けていきたい取り組みです。

人は経験のないことは分かりません。モデルのないことは判断できません。本校の子供たちにとっては、まず、いろいろな学習の仕方や活動を楽しむことが大切だと思っています。そしてようやく、自ら行動が起こせるようになり、その中に「問い合わせ」を見つけられるようになるのではないでしょうか。

ある保護者が寄せてくれた感想を紹介します。

「今まで、自分から進んでいろんなことをしようと言うことがなかったうちの子が、今年、いろんな体験活動をさせてもらったので、初めてのことを楽しみにするようになりました。この頃は、イベントのチラシを自分で見て、『行きたい。』って言うようになったんです。」

今年度、少しずつ提案をするようになった子供たち。つい失敗させたくない、転ばぬ先の杖を差し出しそうになります。しかし、失敗から学ぶことはたくさんあり、そこから探究が始まります。

問題解決の楽しさを実感させるよう、今年は「TRY & ERROR」を合言葉に、我々教員が子供の提案を受け止め、支援していくことを課題として取り組んでいます。

自分の命を守り、持続可能な地域の未来を拓く、主体的な防災リーダーの育成を目指して

— ESD の視点を取り入れた、N助型減災教育カリキュラム『“きみの”できること』の実践 —

和歌山県海草郡紀美野町立下神野小学校

教諭 西尾 達也

1 はじめに

近年世界では、大型地震や風水害等の自然災害が多発しており、子ども達の安全を守るとともに、ESD に提唱されているように安全・安心で持続可能な社会を築いていく資質・能力の育成が求められている。

東日本大震災後の平成 25 年に発行された、『学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開』(平成 25 年)には、減災教育(防災教育)のねらいが以下の 3 つにまとめ述べられている。

ア 自然災害等の現状、原因及び減災等について理解

を深め、現在及び将来に直面する災害に対して、的確な思考・判断に基づく適切な意志決定や行動選択ができるようにする。

イ 地震、台風の発生等に伴う危険を理解・予測し、

自らの安全を確保するための行動ができるようになるとともに、日常的な備えができるようにする。

ウ 自他の生命を尊重し、安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、学校、家庭及び地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献できるようにする。

以上のような力の育成を実現するためのカリキュラムの可能性と、その効果について、4 年生の学習を中心検証していく。

2 主題設定の経緯

(1) 本校の特色と豪雨に伴う被害

本校は山間部の川沿いに位置し、地震や台風等が起きた際、土砂崩れや河川氾濫などによる被害とともに、それらによる集落の孤立が予想される。また、広い校区に集落が点在しており、集落によっては、小学生の児童も避難生活等の大きな担い手となり得る。令和 5 年 6 月 2 日、台風 2 号及び梅雨前線による大雨により、児童の住む地区は大きな被害を受けた。児童の中には、この災害で家屋の被害を受けたり、避難所に一時避難したりする者もいた。家の近くの土砂が崩れたり、長い停電生活を経験したりするなど、児童は災害の恐ろしさを実感し、防災・減災の必要性を感じる機会ともなった。

(2) 気仙沼市への訪問

本校は令和 5 年度「アクサユネスコ減災教育プログラム」助成校に認定された。私は研修として東日本大震災の被災地・学校等を訪問し、大震災の爪痕と、「伝承」を大切にした、防災・減災教育の実践を目の当たりにした。特に、震災直後に行われた、気仙沼市立階上中学校の卒業式答辞の言葉「天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていく」という言葉と、現在語り部として活躍している中学生の「亡くなつてからでは遅い。未災地こそ防災を。」という言葉に感銘を受け、自分達が紀美野町のためにできることを考えるという意味を込めて、「“きみの”できること」と題して本カリキュラムに取り組んだ。

3 研究の構想

(1) 持続可能なN助型減災教育カリキュラム

日本ユネスコ協会連盟理事として ESD の推進に携わる、奈良教育大学の及川幸彦教授は、減災・復興の教育のプロセスには、「①災害発生の仕組」「②災害の社会や環境への影響」「③災害リスク軽減への対応と準備」「④被災からの復興と持続可能な社会の創造」の 4 つのステップの学習が必要であると述べている。避難訓練等の備えだけではなく、社会への影響や事前復興を含むより良き復興について等、持続可能な地域づくりという視点から幅広く学ぶことが必要だと考えた。

また及川教授は、災害対策には、「自助」「共助」「公助」の他に、それらでは対応できない点を埋める、様々な外部機関とのネットワークを活用した「N助」(Network-help)が重要だと述べている。防災・減災教育においても、様々なネットワークを生かした出会いが、学校だけでは設けられない貴重な学びの場となり、緊急時に備えた連携のきっかけにつながるのではないかと考えた。

このような ESD を意識した N助型減災教育カリキュラムの中で、持続可能な地域の未来を拓く、主体的な防災リーダーとしての資質・能力を身に付けさせることができると考え、本研究を進めた。

(2) 身に付けさせたい力と活動内容

本カリキュラムでは、4年生という発達段階を踏まえ、及川教授の唱える4つのステップのうち主に②と③に焦点を当て、育成したい力を以下の通り設定した。

- ア 地域で起こりやすい災害や、被害の軽減や発生後の生活のためにできることについて理解する。(知識・理解・判断)
- イ 災害時における危険を認識し、自らの安全を確保したり、災害後の生活を考え備えたりすることができる。(危険予測・主体的な行動)
- ウ 自他の命を尊重し、他の人や地域の安全に役立つことができる。(社会貢献・支援者の基盤)

これらの力を身に付けさせるため、「課題設定」→「情報収集」→「発信」、「実践」という流れを重視し、【資料1】のような教科横断型の活動を行った。

| 月 | 内容 |
|----|---|
| 6 | 総合のテーマを見なおそう！「きみの」できることとは？ |
| 8 | 地域総合防災訓練 ※総務課による6.2豪雨についての説明、認知症講座など。 |
| 9 | 避難ゲームで議論！「南海トラフ地震が起きたら」 みんなの家は？「家族防災会議」 学校探検・備蓄会議「気仙沼市との違いは？」 |
| 10 | 東日本大震災伝承館とのオンライン学習 |
| 11 | こども園防災遊び交流「小さい子にできること」 リーフレット制作、地域施設への配布 学習発表会「防災～命を大切に～」 |
| 12 | 防災ラジオ「きみの」できること 防災無線放送収録「きみの」伝えること |
| 1 | 防災学習センターと福島の火の館への社会見学 防災調理実習「きみの」食べるもの |
| 2 | 広島県鞆の浦学園との連携防災報告会「きみの」してきたこと 授業参観 家族防災会議「きみの」していくこと |
| 3 | 図工で防災・減災の証 岩バッジ作り |

【資料1】『『きみの』できること』活動内容

4 実践事例

(1) 課題の把握

6月2日の避難所となった学校を調査した。(【資料2】)校内の危険箇所や不足している備蓄などに気づくことができた。後述する階上中学校と比較し、このままではいけないと考え、山間部にある本校にとって必要な手立てについて考えよう話し合った。

また、大雨がなぜ起きたのか、またどのような被害を受けたのかを、町役場総務課の方に教わった。(【資料3】)居住地域によってそれぞれ異なっていた児童同士の被害のイメージを共有認識し、また山間部で起こる災害の恐ろしさを再認識する様子が見られた。

避難してくる際にどのようなトラブルが起こるのかを考えるために、和歌山県の作成する「きいちやんの災

害避難ゲーム」(【資料4】)を活用して課題を出し合った。ゲームの中で、命を守るために必要な様々な「備え」に気づくことが出来た。そのような中で、「うち全然準備していない。」「飛散防止シートとか貼ってるかな？」と各家庭の課題に目を向けている姿が見られた。そこで、ゲームの中での気づきをもとに、家族防災会議を行うこととした。会議の結果、避難カードと一緒に作る、ベッドの位置を変える、ペットの餌を避難バッグに入れておくなど、各家庭に応じた防災の取り組みが各家庭で見られた。



【資料2】



【資料3】



【資料4】

(2) 気仙沼市からの教訓とエール

この実践の導入部では、私が気仙沼市で学んだことについて児童と情報共有した。避難場所に指定されていたにも関わらず津波の被害を受けた杉ノ下高台(【資料5】)、教室が破壊され、3階まで流れてきた車などが残る旧向洋高校・伝承館等から、災害の恐ろしさや想定に捉われないことの大切さについて話し合った。また、階上中学校に受け継がれている答辞や小学校への防災遊び活動、語り部として活躍している中学生の言葉などに感銘を受け、もっと気仙沼市の人々に話が聞きたいという声があがった。

そこで、震災時向洋高校の教員で、東日本大震災遺構・伝承館の館長さんに、オンラインでインタビューを行った。(【資料6】)当時の苦しい避難所の状況、日頃の備えの大切さ、そして、「伝え続ける」ことの重要性を教えて頂くことができた。

インタビュー後すぐ、「自分達もしっかり勉強して伝えたい！」と話し合った。まず隣接するこども園の子に伝えようという話になり、階上中学校へアドバイスを求めた。階上中学校は快く引き受け下さり、防災遊びで活用したカルタや紙芝居、塗り絵のデータと、エールの手紙を送って下さった。(【資料7】)児童は感動し、今後の活動への意欲と自信につながった。



【資料5】



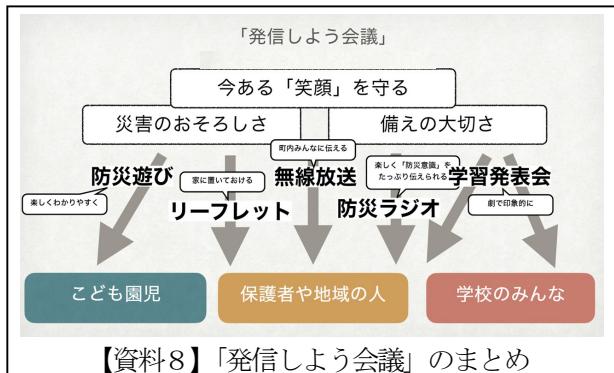
【資料6】



【資料7】

(3) 発信する力

学級で「発信しよう会議」を開いた結果、【資料8】のような話になり、活動を進めた。



初めに、階上中学校からのアドバイスをもとに、こども園との防災遊び交流に取り組んだ。「学校に避難してきたときに一緒に過ごすから、今のうちに関わりたい。」「災害は恐いけど、備えておくことで守れるって伝えたい。」という思いのもと、グループに分かれてカルタや塗り絵、紙芝居を作成し、こども園児と交流した。振り返りでは、「自分達が役に立てた。」「しっかりと伝えるために、情報が正しいか、しっかりと確認しなくちゃいけないと思った。」といった声が聞かれた。



【資料9】防災遊び交流の様子

地域の方に発信するために、紀美野町役場総務課に協力頂き、リーフレット作りや防災無線放送を行った。リーフレット作りは、国語科で学んだ「要約」の知識を生かし、いざというときにもすぐ手に取れるような端的な内容を心掛けた。制作したリーフレットは、役場をはじめ、地域の施設等に設置して頂いた。リーフレットの内容をさらに厳選し、2か月ほど町内全域に収録した呼びかけのメッセージを放送して頂いた。これらの活動を知った町長や地域の方々から、たくさん励ましの言葉を頂き、児童は自分達の取り組みが地域の方を守ることにつながっていると感じることができた。

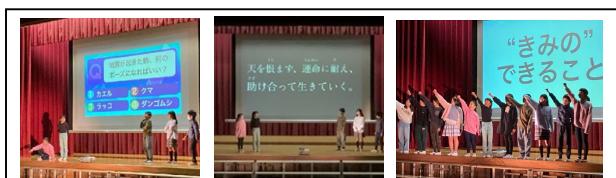


さらに、地域のラジオ局と共同で、楽しくありのまま防災・減災の思いを発信できるよう、1時間のラジオ番組を制作させて頂いた。番組の中では、学校探検で見つけた危険な場所や必要な備えについてフリートークを行ったり、クイズコーナーで問題を出し合ったり、更にはお便りコーナーと題し、様々な先生方からの質問に答えたりした。トークの中で、自分達の取り組みを振り返り、主体的に発信することができた。



【資料12】番組のチラシ、収録、はがきの様子

学校では、学習発表会にて防災・減災の大切さを訴える劇を行った。学級で話し合い、想定にとらわれることの恐ろしさと備えの必要性を伝えるストーリーを作り、練習に励んだ。練習の中では、「このとき避難する人は本当に走れたのかな?」「どうやったらみんなに危機感が伝わるだろう?」といったように、改めて被災時の身の守り方や思いの伝え方について話し合っていた。発表後はやりがいを感じ、次の取り組みについて考える姿が見られた。

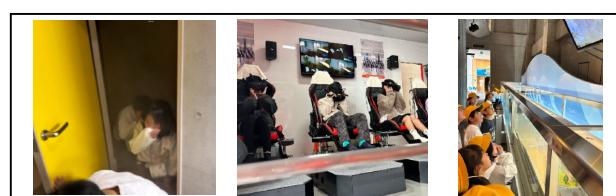


【資料13】学習発表会の様子

(4) 様々な体験活動

発信していく中で、もっと自分達が動けなければいけないと感じ、様々な体験活動を行うこととなった。

1月には和歌山市消防局防災学習センターと、稻むらの火の館へ社会見学を行った。防災学習センターでは、煙避難体験や消火器体験、VR 地震体験などを通し、災害の恐ろしさを身をもって感じることができた。稻むらの火の館では、県の偉人である濱口梧陵の功績について学ぶとともに、津波の実際の高さを目の当たりにし、気仙沼について学んでいたときの津波の恐さや避難三原則の大切さを再認識することができた。



【資料14】防災社会見学

(5) ネットワークの力

他にも、減災教育に取り組む広島県福山市立鞆の浦学園と報告会(【資料 15】)を行ったり、お世話になつた方へ防災・減災の証として缶バッジ(【資料 16】)を制作して配ったりといった取り組みを行つた。「防災の輪が広がつてゐる!」という自信と喜びにつながつた。



【資料 15】



【資料 16】

5 成果と課題

(1) アンケートの結果

カリキュラム終了後、全11名の児童と保護者にアンケートをとつた。結果は【資料 17】のとおりである。

| | | あてはまらない | ややあてはまらない | ややあてはまる | あてはまる |
|------------------------------------|--|---------|-----------|---------|-------|
| 児童アンケート | | | | | |
| ①はじめに比べ、防災の大切さがわかつた。 | | 0 | 0 | 1 | 10 |
| ②「まみのできること」で協力してがんばれた。 | | 0 | 0 | 1 | 10 |
| ③「まみのできること」を続けてきてよかった。 | | 0 | 0 | 1 | 10 |
| ④家族の防災意識が高まつた。 | | 1 | 1 | 4 | 5 |
| ⑤自分の取り組みは、家族や地域の人役につながり組みだと思う。 | | 0 | 0 | 0 | 11 |
| 保護者アンケート | | | | | |
| ①子どもの防災への意識が強まつた。 | | 0 | 1 | 2 | 8 |
| ②子どもは、防災学習にやりがいを感じている。 | | 0 | 0 | 3 | 8 |
| ③子どもは防災学習を通して、学ぶことや頑張ることのよさを感じている。 | | 0 | 0 | 4 | 7 |
| ④家庭で、防災に対する意識が高まつた。 | | 0 | 1 | 5 | 5 |
| ⑤この取り組みは、各家庭・地域の防災につながる取り組みであった。 | | 0 | 0 | 3 | 8 |

【資料 17】アンケート結果

(2) 成果

児童、保護者とともに、防災への主体性や社会貢献について概ねよい評価となつた。特に、家族や地域の人のためになつてゐるという自己有用感が見られた。

④の項目がやや低い結果となつたが、児童から話を聞くと、「飛散防止フィルムを買ってくれない。」等、実践前に比べ「できている。」という水準が高まつてゐる様子が見られる。保護者アンケートの自由記入欄においても、「私達も新たな発見があつた。」「家族で話し合うきっかけとなつた。」といった声を頂いた。

本カリキュラムの中で、山間部での災害の恐ろしさや減災についての知識理解、想定に捉われない危険予測や備えに対する主体的な行動、そして地域の安全のために貢献しようとする心など、持続可能な地域の未来を拓く、主体的な防災リーダーに必要な力を身につけ、發揮する姿を数多く見ることができた。

また今回の実践で、様々な機関とのネットワークを構築することができた。学校だけでは実現できない、命や地域の未来を守る学習になつたとともに、次年度以降の取り組みにつながる連携をとることができた。



【資料 18】ネットワークの構築※児童掲示用(1月)

「うじオしゃうろくは、この4年生じいきよとゆうきかいは、めったにならないのできることはまだ少しあれしかったです。わたしはいまおもとといちねんかんもみのできることとして、うさぎのことをべんきょうしてじとくをなじゆくとおもひ。」

防災学習教育 1年間 ありがとうございました。
防災に対して意識が高まると思います。
自然災害は今後の課題となるのは間違ひない。確かに災害は恐怖しかないが、「きみの」で「まこと」の学習を基に自分の命を守る行動をお願いしたい。防災=命 命体を希望に変えて!うなご聞かれて頂きました。防災をすごく楽しく学習出来ていいなとも思つたです。

【資料 19】児童・保護者のアンケート(一部抜粋)

(3) 課題

本実践は4年生の活動を中心に行つたため、盛り沢山で、今後も継続して行える持続可能なカリキュラムとはならなかつた。また、教科横断で計画を立てたが、一部の教科に偏つてしまい、時数の確保が難しかつた。

内容については、発達段階に応じていないと感じるものもあり、特に、「④被災からの復興と持続可能な社会の創造」の学習を深めることは難しいと感じた。

以上のことから、6年間を通した系統性あるカリキュラムとなるよう、再編成する必要があると感じた。

6 おわりに～令和6年度へのつながり～

今回の取り組みを生かし、6年間を通した生活科、総合的な学習の系統的なカリキュラムを編成し、その中に防災・減災教育の位置づけを行つた。低学年の防災グッズ作り、4年生では、学校運営協議会と共に地域総合防災訓練に向けたクイズの作成などの取り組みにつながつてゐる。

6年生は、伝承館の協力のもと、東日本大震災時の気仙沼市危機管理課長の方からアドバイスを頂き、保護者や地域の方の地域への要望を調査し、地区合同の防災訓練の実施や、事前復興計画の作成など、より良き復興(BBB)及び、事前復興に向けたアイデアを考え、町の行政へ提案書を提出することができた。

今回の実践で得た知見とつながりを生かし、持続可能な地域の未来を拓く、主体的な防災リーダーの育成を目指して、今後も研究・実践を進めていきたい。

和歌山県の恵み「わかやまジビエ」を活用した家庭科での取組

— 生徒が食に対して興味関心を持ち主体的に食に関わるために —

和歌山県立和歌山盲学校 家庭科
代表者 栄養教諭 横山 知香

1 はじめに

平成17年に食育基本方法が国として施行され、家庭、学校、保育所、地域等を中心に国民運動として、食育推進に取り組んでいくことが定められた。

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の各学習指導要領総則において、学校における食育の推進が位置付けられており、各教科を相互に関連させながら栄養教諭及び教諭が連携し、地域の産物を学校給食に使用するなどの創意工夫を行いつつ、学校教育活動全体を通して、より一層の食育の推進に取り組むこととされている。

2 学校の概要

本校は和歌山県の和歌山市にあり、平成30年度に100周年を迎えた歴史の長い学校である。視覚に障害のある幼児児童生徒を対象とした学校であり、校内には寄宿舎が併設されている。全校幼児児童生徒は25名であり、和歌山県の田辺市や新宮市など遠方の地域の生徒も在籍している。

3 学校給食の概要

概要については表1に示す。

表1 学校給食の概要

| 給食実施人数 | 幼稚部 | 小学校部 | 中学校部 | 高等部 | | | 職員 |
|--------|-----------------------------|------|------|-----|-----------|-----------|-----|
| | | | | 本科 | | 専攻科 | |
| | | | | 普通科 | 保健 理療科 | 保健 理療科 | |
| 1人 | 4人 | 3人 | 6人 | 1人 | 5人 | 5人 | 68人 |
| 給食費 | 325円 | | | | | | |
| 調理方式 | 自校方式（直営） | | | | | | |
| 調理従事者 | 栄養教諭 1名、調理員 4名 | | | | | | |
| 給食内容 | 完全給食 週5日 (米飯:週4日 パン:週1日) | | | | | | |
| 給食場所 | ランチルーム | | | | | | |
| 年間回数 | 205回 | | | | | | |

4 生徒の実態

令和5年度高等部普通科在籍生徒は弱視であり、授業の際には単眼鏡や拡大ルーペ等を活用している。

今回、実践を実施した高等部はBMI 25以上の生

徒が33%と肥満傾向の生徒が多い。好きな食べ物を聞かれても「特にない」と答えるなど食事に興味関心が低い。また、生活経験が少なく日頃食べている食品の名称や、加工食品の原料を何か知らずに食べているなど食に関する知識も乏しい。

食に関する以外では、全校児童生徒数が少ないため、生徒1人で実施する授業が多く、集団で学習する機会が少ない。そのような環境もあり、他の人に自分の思いや主張を表現することが苦手な傾向である。

5 主題設定の理由

本校は視覚障害の児童生徒がたくましく21世紀を生きるために①健康・体力の向上②発達課題・生活課題の克服③自主独立精神の育成と社会参加を目指すことを学校教育目標として日々の教育活動に取り組んでいる。健康・体力の向上のためには、児童生徒が心身ともに健康で生活できるよう校内で食育を進めていく必要があるとともに、児童生徒が食に関する知識・技能を身につけ、自らの健康を考え、身につけた知識や技能を実生活に生かすことが大切である。

そこで、「わかやまジビエ」を活用した取組を通して、生徒が主体的に食に関わり、食に対して興味関心を高め、地域の食材への理解を深めるとともに、学習した内容を発信することで、生徒の自信にもつながるのではないかと考え実践することとした。

6 実践内容

- ・教科 家庭
- ・科目 家庭総合
- ・単元名 「食生活をつくる」
- ・対象 高等部1年生弱視女子 2名
高等部2年生弱視男子 1名

生徒がジビエ肉の良さ及び環境や自然に配慮した食生活の大切さを知り、ジビエ肉を活用したメニューを考案し、本校の学校給食及び県庁の食堂で考案

したメニューを提供してもらう取組を実施した。

(1) 教科における取組

授業を実施する前に生徒が「わかやまジビエ」についてどの程度、知識があるか確認するため「わかやまジビエ」についてアンケートを実施した。

事前アンケートの内容と生徒の回答

①知っているお肉は？

牛・豚・鶏・羊・馬・猪・くじら

②ジビエという言葉を聞いたことがある？

ある 2名 ない 1名

③ジビエを食べたことがある？

ある 2名 ない 1名

④なぜジビエを食べると思いますか？

⑤ジビエのイメージは？

においてがきつい、日常ではありません食べないなどの回答であった。

和歌山県では、毎年、学校給食に無償で「わかやまジビエ」が提供され、本校でも毎年1回程度、「わかやまジビエ」であるイノシシ肉やシカ肉のミンチを使用したカレー等を給食で提供しているが、アンケートでは、食べたことが無いと回答した生徒が1名、食べたことがあると回答した生徒も給食で無く、家庭と回答しており、生徒は「わかやまジビエ」が学校給食に提供されていることに気づいていないことがわかった。なぜ、ジビエを食べるかという問い合わせについては、すべての生徒がわからないという回答であった。そこで、まず「わかやまジビエ」とは何か、イノシシやシカによる農作物への被害や捕獲数等、ジビエについて学習し、駆除されたジビエの利活用について考える授業を実施した。その際、イノシシとシカの頭の骨を準備し、実際に頭の骨に触れるとともに、県内の農家に電話でインタビューし、鳥獣による農作物の被害について話を聞く機会を設け、より自分たちに身近なことであると実感できるよう取り組んだ。次に図1に示すようにイノシシ肉とシカ肉を自分たちで炒め試食した。炒めている際、生徒から匂いが気になるや、試食した際は、イノシシ肉は少し臭みが気になるが、シカ肉は他の肉とあまり変わらないなどの感想があり、味・お肉の硬さなど確認し試食していた。



図1 わかやまジビエの試食

また、ケッチャップや醤油、ポン酢など身近な調味料を活用し、それらの中からどの調味料と相性がいいか試食し確認した。その後、試食したジビエ肉の情報を参考にメニューを考えた。生徒は肉の臭みを消すにはどうしたらよいか、給食にも提供するため、アレルギーにも考慮する必要があるなど自分たちで工夫しながらメニューを考えていた。

その結果、イノシシ肉とシカ肉を使用した「ジビエハンバーグ」とイノシシ肉を使用した「ガパオライス」の2つのメニューを考案した。どちらのメニューもジビエ肉の独特の臭みを消すため、にんにくとしょうがを使用している。また、試食した際にイノシシ肉は他の肉に比べ弾力があり、イノシシ肉のみを使用すると固くなりすぎると考えたため、ハンバーグにはイノシシ肉とシカ肉を使用することとした。ガパオライスは、目玉焼きがご飯の上にのっている場合が多いが、給食が大量調理であることや卵アレルギーの生徒のことも考え、目玉焼きではなくコーンを使用することとした。これらの工夫した点や分量、作り方を掲載したリーフレットを図2のように生徒が作成し、その後、考案したハンバーグと、ガパオライスを自分たちで調理し、試食した。最後に教科で学習した内容及びレシピや調理実習等についてまとめた3分程度の動画を作成した。



図2 生徒が作成したリーフレット

(2) 学校給食での取組

生徒が考案した「ジビエハンバーグ（イノシシ肉とシカ肉のミンチ使用）」と「ガパオライス（イノシシ肉のミンチ使用）」を図3に示すように、令和5年度2月の学校給食に取り入れた。



図3 給食で提供したジビエハンバーグとガパオライス

生徒から給食で提供する際に、みんなの感想を聞きたいと提案があり、生徒がアンケートを作成し、校内の幼稚児童生徒職員に実施した。

アンケートは、おいしかったか、独特の匂いが気になったか、また、給食で食べたいかなどを聞く内容であった。ジビエハンバーグについては臭みが少し気になるという意見もあったが、ガパオライスについては気にならなかったとの意見がほとんどであり、アンケートの結果から生徒自身が臭みを消せるよう工夫した効果があったと実感することができた。他にもジビエハンバーグについては「食べごたえがあった」や、ガパオライスについては「色どりがきれいで食欲が出た」や「定番メニューにしてほしい」との意見があった。

アンケートを

実施したことで、食べた方の様々な意見を生徒が確認することができたとともに、アンケートを記入する児童生徒にとつても食べるだけでなく、自分なりに食べたものについて感想を伝えるよい機会となった。アンケートの結果については、図4に示しように生徒が集計し、校内に結果を掲示した。

(3) 地域と連携した取組

今回メニューを考案した生徒の1名が前年度、和歌山県庁内にある県庁職員等が利用する「きいちゃん食堂」で職場実習を実施しており、そ

のつながりから、図5のように生徒が考案したジビエハンバーグとガパオライスを、「きいちゃん食堂」でも提供していただいた。それぞれのメニューを1週間1日10食限定で提供していただいた。



図5 きいちゃん食堂で提供したジビエ料理

食堂で提供していただくに当たり、生徒から宣伝用のポスターを作ったほうがいいのではとの意見があがり、ポスターを作製した。作成したポスターは図6に示す。



図6 生徒が作成したポスター

また、作成のみでなく、作成したポスターを持参し、生徒が県庁の職員に向けて宣伝活動及び学習内容の説明も行った。3人とも緊張している様子を感じさせずに堂々と説明することができたとともに、生徒からは「思っていたより緊張しなかった」や「発表あんまり苦手じゃないかも」との感想が聞かれた。きいちゃん食堂では、ジビエメニューが提供される期間に作成したポスターとともに、学習した内容をまとめた掲示物についても掲示していただいた。

ジビエメニューが提供されている期間には、生徒とともにきいちゃん食堂を訪問し、実際に提供されているジビエメニューを食べるとともに、

図7のように生徒が考案したジビエメニューを食べている方に、インタビューを実施した。

生徒はきいちゃん食堂を訪問し、実際に食べている人の様子を見るまで、自分たちが考案したジ



図7 インタビューの様子

ビエメニューが提供されている実感がなかったが、訪問し、食堂の厨房にジビエハンバーグ1つと注文の声がかかる様子をみることで、頼んでくれている、もう売り切れじゃないなど生徒同士で会話し、自分たちが考えたジビエメニューをみんなに食べてもらっているという喜びを感じていた。きいちやん食堂訪問後の生徒の感想には、たくさん的人がおいしく食べてくれていてうれしかった、安心した等の感想が書かれていた。また、考案したメニューを提供していただいたきいちやん食堂へお礼の手紙を書いた際にもお礼とともに自分の考えたジビエメニューがきいちやん食堂で食べることができてうれしかった、みなさんにたくさんに食べてもらってうれしかったなど自分達が考えたメニューをたくさんの人においしく食べてもらえた喜びが書かれていた。

(4) 家庭と連携した取組

これらの取組について保護者にも知ってもらい、興味・関心を持ってもらうため、毎月発行している給食だよりで紹介するとともに、県庁の食堂でのジビエメニューの提供期間等も掲載した。

(5) 教科担当教諭との連携

家庭科担当教諭が家庭科で取り組んだことを校内の職員向けに発信している通信に今回の取組を掲載するとともに、壁新聞などの掲示物を職員室前に掲示し、今回の取組を校内の職員に知ってもらう機会とした。

7 成果

- (1) 生徒が考えたメニューを給食で取り入れることで、生徒がジビエメニューを食べた方の反応や感想を直接聞くことができる機会となった。取組を実施した生徒は、他の教員から声をかけてもらったり、自分たちから工夫した点を話したり、他の人にメニューの感想を聞く姿が見られ、生徒にとって印象に残る取組となった。また、当日は教員同士の中でもメニューが話題になるとともに、調理員が生徒や職員にジビエについて味はどうでしたかなど話す様子も見られ、取り組んだ生徒のみでなく職員も含めて学校全体の話題になり、生徒のみでなく教職員の興味関心を高めることができた。
- (2) 一緒に取り組んだ家庭科担当教諭とともに学校

給食を活用することのよさや効果を再確認するとともに、教諭から来年度はさらに発展させて取り組んでいきたいとの意見があり、次年度も継続して取り組んでいくことにつながった。

(3) 同じ取組を3名の生徒で実施し、可能な場合は合同で授業を実施することで話し合い活動や、それぞれの考えを共有する機会等を授業に取り入れることができた。

(4) 「給食で提供したジビエメニューの感想を聞いたい」や「きいちやん食堂でよりみんなに知つてもらうためにポスターを作成したい」など生徒自ら考え積極的に提案する場面が多く見られ、主体的に活動に取り組む姿が見られた。

(5) 学習した内容を学校外の職員に説明することで、生徒が自信を持って発信できる力を身につけることにつながった。

(6) 取組を給食だよりで紹介することで、職員の家族や生徒の保護者がジビエメニュー提供期間にきいちやん食堂を訪問してくれた。また、ガパオライスを考案した生徒が休日にガパオライスを作り家族に提供するなど、学校で取り組んだことが家庭へとつながった。

8 今後について

今回の取組については、家庭科で実施したが、カリキュラムマネジメントの充実のため、教科等横断的な視点に立って、様々な教科との関連を示し、効果的な指導ができるよう取り組んでいきたい。

また、保護者の方には取組を知っていたりだけでなく、参観日等に給食試食会を実施し、実際に生徒が考えたジビエメニュー食べていただく機会を設けたい。

次年度は和歌山県の太地町の食文化である鯨肉を教材とした取組を実施しようと考えており。継続して同様の取組を実施していきたい。

9 おわりに

すべての児童生徒が生涯を通じて心身共に健康で豊かな生活を送ることができるよう引き続き全教職員と連携し、栄養教諭として専門的な立場から情報発信し、今後も食育を学校全体で推進していきたい。